

富岡洋子作 「一枚の地図」

<前編>

(音楽) (「瞳はダイヤモンド」歌 松田聖子)

松本真喜モノローグ (ため息) あーあ、もうどうしよう。あーん、そんなのイヤだイヤだ。

真喜ナレーション わたし、松本真喜。「真喜」っていう字は「真^{まこと}の喜び」って書くんだけど、目下、たった一人のボーイフレンド、田代君にフラレそうな暗い雰囲気なの。若干高校2年のキビしい冬を迎えてるわけ。

真喜モノローグ あーもう、イライラするなあ。

(効果音) (真喜の部屋のドアを弟が開ける音。レコードの歌、急に大きく聞こえる)

弟健二 お姉ちゃん、何やってんだよ。うるさいじゃないか。

真喜 あん？

健二 何考えてんだよ。小さくしろよ。

(効果音) (健二、ボリューム下げる)

真喜 何よ。勝手に触らないでよ。

(効果音) (真喜、またボリューム上げる)

健二 何すんだよ！

真喜 うるさいわね！ あっちへ行ってよ！

健二 なんだよ。おれがかけるとすぐ文句言うくせして、そんなのありかよ！

母 何してるの？ どうしたの、二人で？

(効果音) (母、レコードを止める音)

健二 あ、お母さん。お姉ちゃんたらね、人の迷惑も考えないで、レコード、ガンガンなんだもん。

真喜 人間きの悪いこと言わないでよ。ただレコード鑑賞してただけじゃない。

健二 言うかなあ。何がレコード鑑賞だよ。あんな…。

母 (かぶせて) 健ちゃんももう分かったから。そうか。真喜ちゃんは何かうつぶん晴らしをしたかったんだ。うん？

真喜 う、うん。まあ…。

健二 僕知ってるよ、そのわけ。お姉ちゃん、今、ピンチなんだよね。ね？

真喜 何よお、健二、その言い方。

母 あら、ピンチって？

健二 フラレそうなんだよ、ボーイフレンドに。な、お姉ちゃん？

真喜 こいつ！ なんでそんなこと。

健二 (かぶせて) だってボーイフレンドの田代君から、最近全然かかってこないじゃん、電話。そうなるとうるさいんじゃないの？

真喜 健二！（ピシヤリと平手打ち）
健二 いて！
母 真喜ちゃん！
真喜 健二が悪いんだからね。余計なことばかり言って。
健二 ぶつことないだろ。自分だって…。
母 （かぶせて）健ちゃん、自分の部屋へ戻ってなさい。さ、ねえ、さあ。
（効果音） （ドアの閉まる音）
母 （ため息）ふー、久しぶりね、兄弟ゲンカ。手が出たのは初めてじゃない？
真喜 …ごめんなさい。でも…。
母 まあいいわ。よく分かってるでしょうから。それより、さっきのボーイフレンド、田代君だったわね、確か隣のクラスの男の子かしら？
真喜 そう、C組。
母 彼のお話、よかったら聞かせてほしいな。お母さんで力になってあげられることがあるかもしれないしね。
ナレーション うちのお母さんて、とても話が分かるの。なんたって、中学校の教師、現役だもん。頭もいいし、顔もいい。家中で教会へ行ってるから、近所の人たちからは「いいお母さんもって幸せね」とか言われて、小さいころは自慢だった。でも最近はその親ともろに比べられて、「あの松本先生の娘さんなの？」とか、“以外”って顔して見られたりすると、ちょっぴり劣等感。
母 ふーん。そうねえ、高校生くらいのお付き合いになると、難しいのねえ。
真喜 うん。田代君にさ、「真喜はお堅いんだよな」ってこの間言われてから、なんかギクシャクしちゃって。
母 「お堅い」？
真喜 うーん。例えば日曜日は教会へ行くからデートできないし。彼、最近タバコやり始めたんで、怒ったらイヤな顔したし。ほかにも…あると言えばあるんだけど。
母 うん、なるほどね。やめたほうがいいわね、お付き合い。
真喜 えー？ どうして？
母 彼は正しいことをするのが嫌いなのよ。あなたの生きる道とは違う。
ナレーション 母の思いがけない強い言葉に、わたしは動揺していた。このところ、遊びのために時々日曜日の教会の礼拝をサボったり、遅く帰宅したりしたのを逆に思い出させてるみたい。こうなると、わたしの中の何かがムズムズして、ムキになって反論したくなってしまう。
真喜 “わたしの生きる道”ってなんなの？ 何が正しいことなの？ わたしだって、小学校までお父さんやお母さん、先生の言うこと、何でもよく聞いて、勉強も素直にしたじゃない。だけど、中学や高校になると、どう？ その正しいことが逆に友達に「ぶりっ子」とか言われて、のけ者にされるんじゃない。クラスでは少し

ひねくれた人たちが人気者で、不良じみたことをするのが勇気だってみんな思ってる。正直なだけじゃダメなんだ。みんなに合わせて、うまくやっていかなくちや。

母 でもね、真喜ちゃん。神様はね…。

真喜 (かぶせて) 要らない。神様なんて要らない。だからやなんだ。「神様 神様」って。他力本願で。そんな弱虫になりたくないわよ！

母 あ、真喜ちゃん。

(効果音) (ドアが閉まる音)

ナレーション 母の声を背に感じながら、わたしは寒空の中、家を飛び出していった。

真喜 (エコー) “わたしの生きる道”ってなんなの？ 正直なだけじゃダメなんだ。みんなに合わせて、うまくやっていかなくちや。

真喜モノローグ そうだ、確かに間違っていない。わたしは正しい。

ナレーション そこへ、帰宅途中の父と出くわした。

父 おお、なんだ、真喜、こんなところで？ お父さんを迎えに来てくれたのか？

真喜 ううん。そういうわけじゃ…。ただちょっと外の空気を吸いに。

父 ふーん。ま、息抜きも必要だな。よし、久しぶりに4丁目の公園へでも行くか。

ナレーション 父は、最近のわたしが何かイライラして、母に対しても今までの素直さをなくしているのを、父なりに感じ取っていた。今も、わたしの様子からきっと何かを察したのだろう。父はブランコに乗るとわたしの幼いころの話を始めた。

(効果音) (ブランコのきしむ音)

父 あれは、お前が4つか5つのころだったなあ。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション(朗読) 同じ幼稚園に通っていた男の子と、どこでそうなったのか、近所のおばさんの大切にしている庭荒らしをやるとうことになった。別にそのおばさんに恨みがあったわけではない。なんとなく刺激を求めた“遊び”であったのである。そのおばさんが子供に厳しいのもスリルを増すことになり、わたしたちは魔女の城から宝物を取ってくるお姫様や王子様気分だった。そして「見つかりっこないさ」という気持ちがお足を急がせた。ところが――。

(効果音) (ガシャンという音)

おばさん こらー！

ナレーション(〃) 王子様もお姫様も哀れな現行犯となり、即“逮捕”、親に“連行”という事態となった。その時の母の悲しい顔をわたしは今も忘れられない。母はその悲しい顔で、わたしが破ってダメにした葉牡丹を求めて、市内の花屋中、わたしを連れ歩いた。その時期に葉牡丹が既がないことを母は十分知っていた。それでも母は、わたしを連れ回った。1軒、2軒と回るうち、わたしはだんだん追い込まれていった。母は黙って3軒、4軒と繰り返した。最後に、わたしは泣きながら

母に謝っていた。

真喜(少女) (泣きながら)お母さん、ごめんなさい。

ナレーション(〃) わたしがしたことのため、母が悲しみながら、足を棒にするのを見て、わたしの心は初めて痛んだのである。母の悲しみが、わたしを愛するがゆえであることを、幼いながらわたしは理解した。

母 一番悲しいのは、あなたを一番愛してくださっている神様ですよ。

ナレーション(〃) 母は若いころからクリスチャンだったそう。だれも見えていないとき、罰する者がいないときも、母のこの言葉はわたしの心によみがえり、何か悪いことをしようとするわたしにブレーキをかけた。

(音楽) (回想の終わりのブリッジ)

父 そうだったなあ。あの庭荒らし事件のあと、お前は、とても素直な、いつもニコニコした女の子になったよ。今日も、お母さんはきっとお前のためを思って…。(FO)

真喜モノローグ 分かっている。分かっているよ。頭の中では、それがいいんだってことくらい、分かっている。だけど今、今のわたしは違うの。わたしの中で何かが変わったの。なぜかイライラ。田代君のせいだけでもないようなイライラ。とにかく当たりたい気分。もう最低！

(効果音) (学校のスポーツクラブ活動風景。ホイッスル。「ファイト！」の掛け声など)

真喜 今日はこれまで。解散。

部員 (異口同音に)ありがとうございました！

(効果音) (ガヤ)

幸子 真喜。今日の練習、気、入ってたじゃん。近寄りがたかったよ。ね、優子？

優子 うん、ほんと。幸のいう通り。やっぱ、キャプテンの貫禄かな。

真喜 そうお？ 幸や優子たちにも頑張ってもらわなくちゃ。春の大会でどこまで勝ち進めるか。わたし、自分の可能性を試してみたいの。

幸子 できる できる。真喜はセンスいいから。

優子 さすが、学校の先生の子供は違うなあ。

真喜 親は関係ないでしょ。人生、結局は自分一人よ。自分の力で生きるんだから。

ナレーション まるで自分に言い聞かせてるようだった。そう、みんなそうなんだ。

それから数日後、イヤな予感が的中してしまった。田代君から最後の電話が来た。

真喜 (電話)どうして、田代君？ そんな…。わたし、あなたのために変わろうとしたじゃない。あ、待って！ お願い、切らないで。え、もう遅い？ ダメなのね。…分かった。さよなら。

真喜モノローグ 惨めだ。わたしはなんて惨めなんだろう。あんなに田代君のために尽くしたのに、それは全部無駄だったの？ 届かなかったの？ あー、もうどこかへ行っ

てしまいたい。惨めなわたしを消してしまいたい。

ナレーション フラフラとわたしは繁華街へ出ていった。
(効果音) (街の雑踏)

真喜モノローグ どうしてみんな普通の顔して歩いているの？ どうしてみんな生きてるのよ？
ふふ、そうよね、フラれることなんて、よくあることよね。そんなこと、そんなこと
…。(涙がこみ上げ、おえつ)

ナレーション 涙でにじむ街を、わたしはあてももなく歩いた。力がどんどん抜けていくようだった。

真喜モノローグ わたしはこれからどうやって生きていけばいいの？ だれか、だれか教えて！
(効果音) (車のクラクション。急ブレーキ)

真喜 キヤー！
(効果音) (救急車のサイレン)

<後編>

(効果音) (車のクラクション。急ブレーキ)

真喜 キヤー！
(効果音) (救急車のサイレン)

ナレーション わたし、松本真喜。青春高校 2 年生。ボーイフレンドの田代君にフラれて、自分に絶望したわたしは、フラフラと町をさまよっている途中、車にはねられてしまった。

父 真喜！ 真喜！ しっかりしろ、真喜！

母 真喜ちゃん。頑張るのよ、真喜ちゃん！

健一 お姉ちゃん、死ぬなよ。目を開けてくれよ、お姉ちゃん！
(効果音) (「ピッ ピッ」と心電図の音)

ナレーション もうろうとした意識の中で、家族みんなの声が確かに聞こえた。わたしはまだ自分がどうなったかさえ分かっていなかった。

医者 真喜さん、松本真喜さん、聞こえますね？ 目をさあ、開けてごらんなさい。

父、母、健二 (口々に)「真喜」「真喜ちゃん」「お姉ちゃん」

真喜 う、ううん。なあに、みんなで？ うるさい。あ、痛！ 痛いよ。なんだ、これ？
ここはどこ？ どうしたの？

父 病院だよ。

健二 お姉ちゃん、車にはねられたんだよ。知らないの？

母 家に連絡が来たのよ。「救急車で運ばれました」って。

医者 全身を強く打ってね。内臓が少し危なかったんだよ。骨は折れていませんでしたけれどね。

真喜 手術、したの？

母 ええ、でも成功したから心配はないわ。

父 1か月もすれば、学校へも行けるようになるよ。

健二 お姉ちゃん、そうすれば失恋の痛手もいえるって。よかったじゃん。

真喜 健二、このやろ。あ、いたた！

医者 (笑う) そのくらい元気が出れば大丈夫です。ゆっくり休むといいですよ。じゃあ、わたしはこれで。

父、母 「あ、先生、どうもありがとうございました」「よろしくお願いします」
(効果音) (ドアの閉まる音)

母 あー、でも本当によかったわ、これくらいで済んで。ねえ、お父さん？

父 ああ。びっくりしたぞ、真喜。

真喜 (こらえきれないように泣き出す)

健二 どうしたの、お姉ちゃん？

父 どこか痛むのか？

真喜 出て行って。みんな、帰ってよ。

健二 え、なんで？

母 (かぶせて) そうね。真喜ちゃんだって気がついたばかりだものね。まだ驚いてるのよ。じゃ、またあとで来るからよく休むといいわ。ね？

父 そうだな。じゃあ、お休み。
(効果音) (ドアの閉まる音)

ナレーション 麻酔が切れて意識がはっきりしてきたら、また田代君のことが思い出されてしまって、涙がこみ上げて止めらなかった。

真喜モノローグ どうして、どうしてわたしは捨てられたの？ そんなに愛ってもろいものなの？ 信じてたのに。わたしはどうしたらいいの?!(エコー)

ナレーション 自分を哀れむ気持ちや、イライラした気持ちにいたたまれなくなって、わたしはある日、とうとう病院を抜け出した。

(効果音) (街の雑踏)

真喜モノローグ あー、久しぶりの外の空気。うーん、気持ちいい。あっと、まだちょっとフラフラするみたい。ずっと寝てるからかな。あんまりからだを動かすと、手術したとこ、また切られちゃうかな。ああいい、それならそうなればいいんだ。わたしなんて、どうなってももうだれも悲しまない！

真喜 あ、痛い！

通行人 A どこ見て歩いてんのよ。

B 危ないわねえ。フラフラして、酔っ払ってるんじゃない？

A 今の若い子はねえ。

B 昼間から、やあねえ。

ナレーション 通行人のおばさんたちにぶつかってしまったわたしは、その場にうずくまった。と、そこへ――。

西山隆 君、大丈夫？

真喜 え？ あ、はい、大丈夫です。

西山 あ、顔色が悪いよ。少し休んだら？

真喜 でもわたし、あの、大丈夫ですから。

西山 よかったらね、そこに僕たちのスタジオがあるんだけど、そこで休んでいきなよ。さ、心配することないから。肩につかまって。

ナレーション 初対面の男の人についていくなんて、いつもなら考えられないことだけど、“この人は違う”って、なんて言うのかな、“ピピッ”って来ちゃったんだ。この人に連れられていくと、そこは小さな喫茶店だった。

西山 僕、西山です。西山隆。今、大学 4 年なんだ。ここはね、フェローシップアワーっていう若い人向けの集まりをする場所なんだ。みんなで歌を歌ったり、話をしたりね。君は？

真喜 あ、わたし、松本真喜。高校 2 年生です。どうもありがとうございました。西山さんはここで何をしてるんですか？

西山 うん。僕の持ち場はあれ。

(効果音) (ピアノに向かって歩く足音)

(音楽) (ピアノを弾き始める)

真喜 あー、その歌、知ってる。

西山 へー、君知ってるの？ じゃ、もしかして真喜ちゃんはクリスチャン？

真喜 え？ は… いえ、あ、あの… その…。

西山 僕も中学 3 年の時にイエス様を救い主と信じたんだよ。いやあ、偶然だなあ。初めて会った人が、クリスチャンなんて。今ね、新しい歌を練習中なんだけど、聴いてくれるかな。「一枚の地図」っていうんだ。

真喜 はい、喜んで。

(音楽) (「一枚の地図」の弾き語り。一節)

真喜モノローグ 「地図」、「人生の地図」かあ。
(効果音) (引き終わり、真喜、拍手)

西山 ありがとう。どうだった？

真喜 とてもきれいな曲！

西山 内容は？

真喜 うーん。そうだな。とっても考えさせられる感じ。

西山 そうだね。“一枚の地図”っていうのは、“自分自身”ってことかなあ。それを頼りに生きてきたけど、人の心は変わりやすくて、曲がり角なんてないと思ってたのに、そうじゃなくて…。

真喜 うんうん、分かる 分かる。壁にぶつかるんだよね。

西山 そうそう。結局、頼れるものは自分じゃないってことに気づくんだ。

真喜 え？ そうかな。だれだって苦しいけど、大変だけど、そうやって生きていくんじゃない？ それが人生なんじゃないのかな。

西山 そうやって生きてきて、どうだった、君は、真喜ちゃん？

西山 じゃ、家まで送るよ。どこ？

真喜 え？…あ、家？ 今はその、病院に入院して…。

西山 え？ 病院を抜け出してきたの？ あっきたなあ。家の人たち、心配してるよ、きっと。

真喜 (バツが悪そうに笑う)

ナレーション それから病院に着くと、やはりみんなで大騒ぎしたらしく、先生や看護婦さん、そして両親から、大目玉を食らってしまった。でも、しかられたのに、明るい気

分なのが、不思議。

父 うん、そちらの方はどなた？

真喜 西山さん。危ないところ助けてもらったりしたの。

西山 あー、松本先生、松本先生じゃないですか！

母 はあ？

西山 僕です。松本隆です。ほら、あの時…。

母 あーら、西山君？ まあ大きくなられたこと。

ナレーション 「偶然 偶然！」と言ったら、「神様のなさることに偶然はありません！」なんてまた母にしかられちゃうけど、西山さんは中2の時の母の教え子なんだって。

西山 先生。僕、先生に殴られたこと、よく覚えてます。あれ1回きりだった。先生が、「君を殴ります。それだけのことをしたこともよく分かってください。二度とこんなことを先生にさせないでください。」って言った時、先生、泣いてたでしょ。あれには参ったな。先生のほうが殴られたみたいな顔してさ。

母 (笑う) そんなこともあったわねえ。

(効果音) (団らん。和やかな話し声のアドリブ)(FO)

(音楽) (「一枚の地図」)

真喜モノローグ お母さんって、やっぱりすごいな。今まで素直になれなかったけど、お母さんの生き方って、芯しんが通ってて。クリスチャンだからって、ちっとも弱くない。ほんと、強いや。

ナレーション そんなことがあってから、西山さんはお母さんの影響で、教会へ行くようになって、イエス様を信じたんだって。

真喜モノローグ イエス様か…。 “教会なんか”って思ってたけど、お母さんや西山さん見てると、なんだか今まで見えなかったものが見えてきたような気がする。——わたしの生きていく道。それは、イエス様の中にあるのかもしれない。

<完>